

(菱刈郡菱刈町大字田中小字松美堂)

位置と環境

遺跡は中心部の町役場から北東約3km離れた、標高約190mの丘陵裾部に立地し、楠元川の上流の河岸段丘状の水田地帯の最上部に所在している。

調査の経緯

圃場整備事業に伴って、菱刈町教育委員会が調査主体となり、県教育委員会の協力を得て平成元年度に確認調査を実施した。その後、現状保存が不可能な範囲については本調査を実施した。

遺構と遺物

調査の結果、住居跡等の大型の遺構等は発見されなかったが、小型のピット群、6基の土坑、溝状遺構等が発見された。遺物はアカホヤ火山灰層から縄文時代前期末から後期にかけての多種多様の型式の遺物と多種の石器が発見された。

小形のピット群は、径が14～40cm、深さが20～30cmのもので、配置が不規則で建物等を想定することはできなかった。

小型の土坑は、径が45～180cm、深さが20～30cmの断面がU字状となっているもので、6基のうち1基については底の部分が赤く変色していることが観察されたことから土坑内で火を使用したものと考えられる。ほかの土坑は底の赤化は観察されなかったが使用頻度の差とも考えられる。

本調査で確認された溝状遺構は等高線に沿っていることから土地の区画を示すものと考えられる。

遺物は、縄文時代前期末から晩期に属するもので広範囲にわたっているが、中心となるのは縄文時代中期から後期のものである。出土土器の主なものを列記すると「深浦式」「轟式」「並木式」「阿高式」「南福寺式」「出水式」「春日式」「松山式」「市来式」「大平式」「鐘ヶ崎式」「西平式」「夜臼式」等の多岐にわたっており、また瀬戸内地方との交流があったことを示す土器も出土している。

出土した石器は、石鏃、石鏃未製品、ピエスエスキュー、独鈷状石器、石錘、石匙、石斧、磨石、敲石等の製品のほかに剥片や石核も出土している。



第1図 松美堂遺跡の位置

これらの石材は目的とする石器によって使い分けがされている。細かい調整を行うものには良質の黒曜石等を用い、大型のものには不純物の入ったものでも利用するといった具合である。田中地区では黒曜石のことを「烏の枕」と呼ばれ、昔から田畑の耕作中に出土していたという。現在でも遺跡の東側を流れる楠元川の川原でも3～4cmの大きさの良質の黒曜石が採集される。良質の黒曜石産地が近くにあるのであろう。不純物のはいる黒曜石は大口市の日東産である。

出土した石器の中で特筆すべきものとして、独鈷状石器がある。粘板岩製で中央のくびれ部のほぼ中央で折損し、片端を欠いているものである。背部は湾曲し、腹部は平坦である。推定復元長は14cmと小形であるが、この石器が発掘調査で出土するのはまれで、西日本で出土したのは枕崎市鞍谷遺跡について2例目である。この石器は縄文時代後期後半から晩期にかけてであるとされているが、この遺跡では多岐にわたる土器が同一層から出土しているため、時期を特定することはできなかったが、出土遺物から鞍谷遺跡と共通するものがあり、関連性が指摘できる。

石器以外では石核や剥片の出土も多く、縄文時代中期から後期にかけての石器製作技術の一端が見られ、この時期の石器製作技術の好資料である。

特徴

この遺跡においては、住居跡等の生活の痕跡を示す遺構等は出土しなかったが、火を使用したと考えられる土坑等が発見されていることから発掘地点近

くの周辺に住居跡等は確実に存在していると考えられる。古代の人々は縄文時代前期の終わり頃から生活をはじめ、縄文時代中期から後期にかけての時代が盛行期であったことが多種多岐にわたる遺物等から推測され、さらには瀬戸内地方との交流も伺わせる遺物も出土している。また、石器は使用目的によって石材を選別して利用し、縄文中期から後期にかけての石器製作技術の解明の好資料ともなると考えられる。

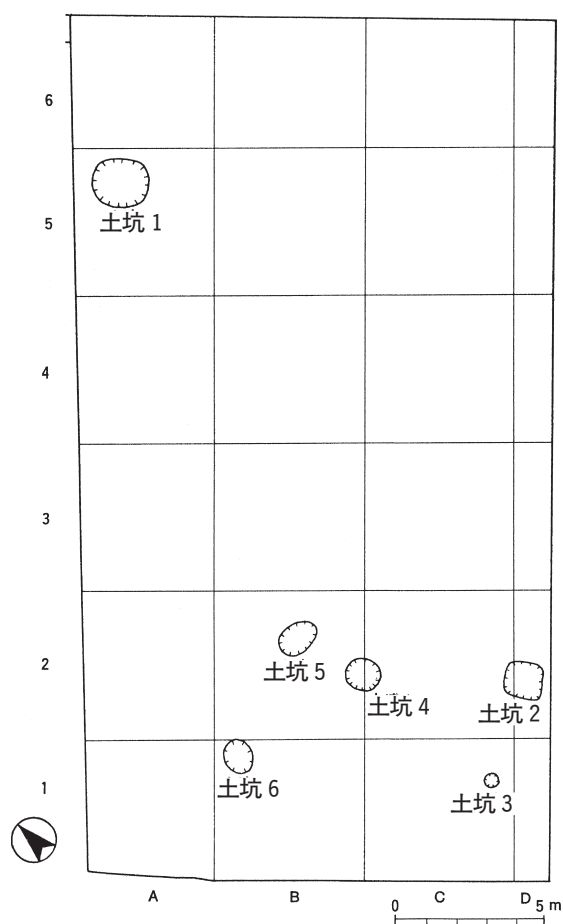
資料の所在

出土遺物は、菱刈町教育委員会に保管されている。

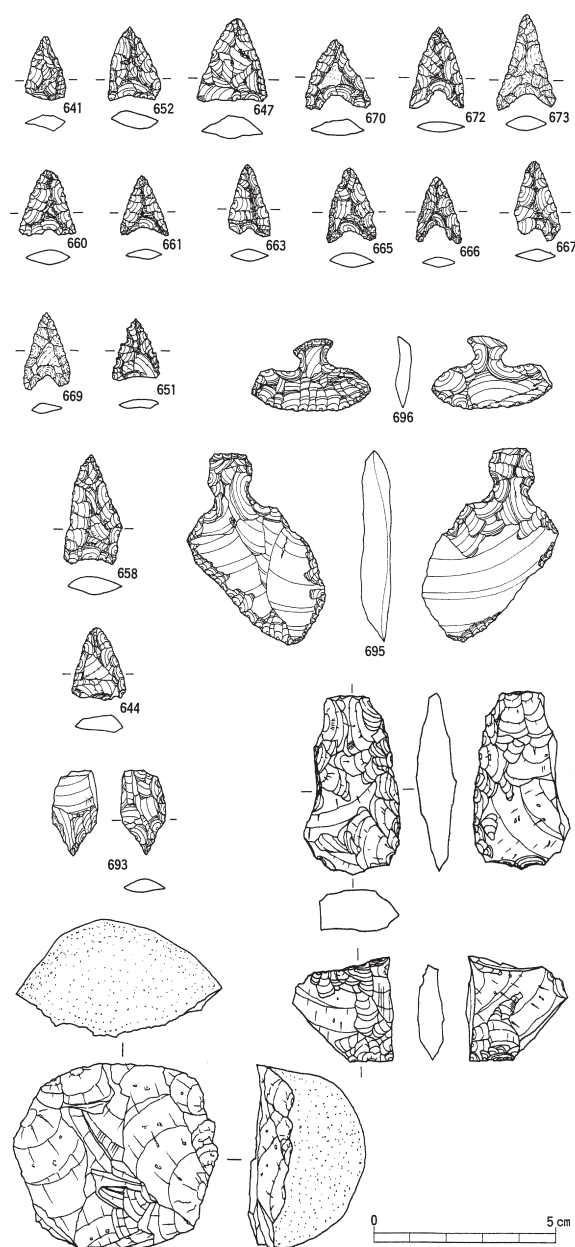
参考文献

菱刈町教育委員会1990「松美堂遺跡」『菱刈町埋蔵文化財発掘調査報告書』5

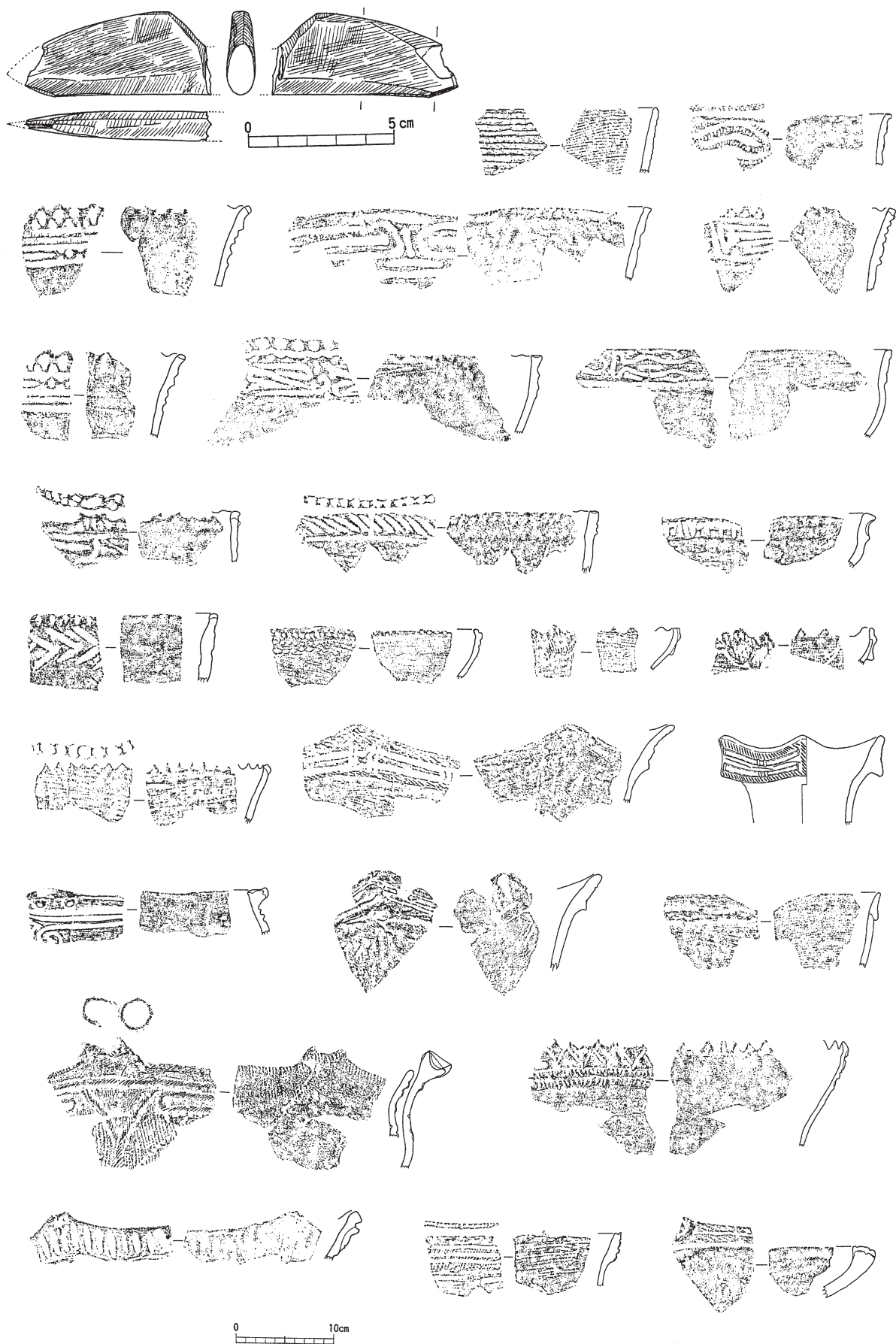
(吉永正史)



第2図 土坑配置図



第3図 出土遺物



第4図 出土遺物（独鈎石・土器類）